

続・一坪農園が教えてくれるもの

両手に持っているのは、“おふくろ”という品種の大根で、おでんには最高である。第 26 号を覚えておられるだろうか？ 会社で市民農園を借りて土いじりをしているという話で、その後も続いている。『生産性は追求せず、不耕起・無農薬・有機栽培で生物学的多様性を目指す』が最初のコンセプトで、今もそれは変わらない。しかし、収穫の味わいも少しは欲しい、耕起・不耕起の比較してみようという意見もあり、無農薬・有機栽培はそのままに昨年は耕起と不耕起を半々で行ってきた。昨夏は、インゲン、モロヘイヤ、ミニトマトを主として、不耕起区の地這いキュウリは、草むらの中で健在であった。隣の区画とのかね合いもあり、幾度も雑草を引き抜きたくなる気持ちを抑えつつ 2 年間、区画の半分は不耕起を貫いた。（もちろん適切な刈払いは行ったが。）その結果、畑に踏み込むと足の裏はサクッ、フワッとした気持ちの良い感触を味わい、多くの昆虫を目にすることが出来た。



約 2 年間、9.09 坪のこの農園と関わり合ってきて、単に収穫の喜びや土いじりの楽しさだけではない意味ある何かを学ぼうとしたのだけれど、「そんな一坪ごときで何がわかるのか。何をえらそうに言っているのか。日々の生活がかかった本当の百姓はそんな生易しいものではないのだ。」と苦言を呈する方もいらして、それはそれで全くその通りであり、お言葉は有難く頂いた。しかし、敢えて言わせて頂くならば、確かに手間・暇をかければ収量は上がるのだが、それはさておき、我々自身がコンサルという日常業務の傍らで土いじりをしながら何かを感じ、考えることに意味があったのだ。

人間も所詮は動物である。不自然の中にいたら変になるのが当然で、自然の中に入るとホッとするのが当たり前。不自然の中では大人も子供もキレるのは当然のことかもしれない。私達は土と離れて生きていくことはできない。毎日食べる米もパンも野菜も肉も魚も…全て土から生まれて土へと帰るのだ。今、日本の穀物自給率は 30%弱である。工業製品を売ったお金で世界から食料を沢山買ってきて、スーパーやコンビニへ行くとピカピカの美しい！？野菜が包装されて整然と並んでいたりして、お金さえあればいつでも買うことができる。でも食べものは工業製品ではない。それらが土と水と太陽の恵みから生まれてくることを多くの人は忘れてしまっていないだろうか？ 作物を作る・育てる喜びを、本当の食べものの味を、忘れてはいないだろうか？ 食事をしながら毎度口にする食べものをどうやって作ったり、獲ったりしているかじっくり考えたことはあるだろうか？ 「いただきます。ごちそうさま。」の感謝の心を忘れてはいないだろうか？ お金を出しさえすれば食べられることが当たり前になっていないだろうか？ 五大欲のひとつである食欲を死ぬほど欲したことが最近あるだろうか？ 家を出てから帰るまでに土の上を歩くことはあるだろうか？ 鍬ではなく、IT よろしく子供達にパソコンを配ることで



日本人は生きていけるのか？…
そんなこんなを考えたつ今晚は、大根でおでんにしよう。
(東京都町田市；小島冬樹)